

4. あとがき

本研究については、平成3年7月より平成6年3月までの間で調査および試験研究したもので、結果としては、現在の橋梁に用いられている鋼材の靱性値ならびに歪時効の実際がつかめ、道路橋示方書の曲げ加工規定（R=15t）緩和も可能と考えられる。

また近年、制御圧延・制御冷却により従来鋼と同程度の強度でありながら、低炭素当量で溶接性を向上させたT M C P鋼については、金属組織が微細化されているため、靱性が非常に高く、歪時効についても非常に有効である事が、平成6年に橋建協で実験が行われた「T M C P鋼板の歪時効実験」結果において報告されており、橋梁鋼材としての採用も期待される。

今後検討が必要なものとしては、実際の鋼材の設計及び使用において、必ずしもロール方向と主応力の方向を一致させることが難しい場合もあり、今後はロール直角方向の靱性値検討も必要と考えられる。

最後に鋼技研の製作部会における参考資料、報告書、論文の一覧表を下記に記載（表4-1参照）するとともに、試験研究に絶大な協力を頂いた東京工業大学の研究生、並びに関係者の皆様にお礼を申し上げます。

表4-1 鋼技研製作部会資料 () : 鋼技研部会回数

資料番号	項 目	種 別
K-1	実験計画他（第9回）資料	資料
K-2	曲げ加工アンケート他資料（第12回）	資料
K-3	予備試験中間報告（第12回）	資料
K-4	歪時効材のシャルピ-試験結果（第18回）	報告
K-5	鋼材の衝撃値調査結果（第19回）	報告
K-6	冷間加工を受けた構造用鋼材に関する研究	論文*1
K-7	冷間加工を受けた構造用鋼材の靱性に関する研究	論文*2

*1:卒業論文（東京工大） *2:修士論文（東京工大）